

アジアにおける哺乳類の種多様性を探る

本川 雅治（京都大学総合博物館）

日本の哺乳類は、固有種が多いことが特徴である。その要因として日本列島や琉球列島への大陸からの分散と、その後の島嶼における隔離が注目されてきた。近年の分子系統地理学からいくつかの種で明らかになった本州や北海道などでの島嶼内分化は、日本の哺乳類相が島嶼における隔離だけでなく、より複雑な要因のもとで形成されたことを示唆する。発表者が研究対象としてきた日本産ネズミ類や真無盲腸類をとりあげ、その種多様性の形成過程を考察する。

一方、日本産哺乳類と関わりの深い国外に分布する種との系統関係や動物地理学はどうだろうか。日本の哺乳類との関わりで、発表者がまず着目したのが台湾である。そして、日本、台湾との関わりで大陸産小型哺乳類の研究を行った。研究を始めるまでは「大陸」としてひとまとめにすることもあったが、実際に研究を進めると大陸産では地域間での分化や種構成の違いが大きいことが分かってきた。これまで中国、韓国、ベトナム、ラオス、ミャンマーなどで進めてきた小型哺乳類の種多様性の研究の経過を報告する。また、島嶼のように地理的隔離の明確でない大陸における分化要因について考察する。日本の哺乳類のより深い理解を目指して始めた大陸での哺乳類の種多様性研究は、今ではアジアを広く対象地域とした種多様性や動物地理の研究へと進展している。

さて、こうした研究を進める上で、各国との共同研究やネットワークが必要であることは疑いない。種多様性の研究では基礎データの伴った標本、そしてそれを保管する博物館の充実も欠かせない。種分類体系に問題のある哺乳類には広域分布種も多く、2国間の枠組みだけでなく、アジア多国間での連携が重要である。発表者は2011年より中国、韓国、ベトナム、2014年よりタイ、マレーシア、インドネシア、2016年よりミャンマー、2017年よりラオスと規模を拡大しながら、日本を含めて現在9カ国が関わるアジア多国間の脊椎動物種多様性研究拠点を推進している。2011年より毎年国際シンポジウムを各国で開催し、次は2017年12月に第7回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウムをミャンマー・ヤンゴン大学で開催する。その過程で、共同研究、標本、博物館だけでなく、それを担う若手人材の継続的な輩出の重要性に気づいた。発表では哺乳類の種多様性理解のための多国間研究ネットワークのこうした取り組みも紹介する。

奨励賞

多角的視点に基づく哺乳類管理研究 -生態系として管理を成功させるために-

飯島 勇人（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所）

本講演では、私が主に取り組んできたニホンジカ管理に焦点を当てる。ニホンジカ管理の目的の一つとして、ニホンジカの摂食や踏みつけによる植生への影響の緩和が挙げられる。この目的を達成するためには、局所スケールでのニホンジカの数と植生の状態を評価し、両者について適切な目標を設定する必要がある。また、ニホンジカは捕獲を避けるため、ニホンジカの行動の変化も考慮して管理を行う必要がある。さらに、得られたデータに基づいてその都度管理計画を見直す体制も重要である。本講演では、ニホンジカの数、ニホンジカに影響を受ける植生、そして管理を行う人間の行動を多角的に評価し、現在の管理の効果と今後の課題を明らかにした事例を紹介する。また、扱う対象を問わず、データを（できるだけ）恣意的に扱わない統計的モデリングの重要性も示したい。

小型鯨類の自然史研究 -標本の保存と活用、そして標本を楽しむこと-

栗原 望（宇都宮大学農学部）

発表者は、鯨類の進化を理解する目的で、博物館標本を用いた小型鯨類の分類学的研究および形態変異、特に地理的変異と成長に伴う変化についての研究を行ってきた。一方で、一標本から得られる全ての生物学的情報を引き出すことを理想として、標本収集と標本の活用に関する研究も行ってきた。例えば、仮剥製から非破壊的にミトコンドリア DNA を抽出する方法を提案したり、海岸に漂着した死亡個体に依存する鯨類研究では不可能と思われた細胞培養および染色体の観察を試みたりしてきた。これらは、蓄積の乏しい、また収集の困難な鯨類標本を扱ってきた経験から生じた課題である。

発表者の研究課題は多岐に渡り、無節操である。しかしながら、発表者は、分からないことだらけの野生動物について、出来ることから、分かることから明らかにしていきたいと考えている。本発表では、これまでの研究の一部と発表者に影響を与えた出来事などを紹介したいと思う。